

震災から六年がたちました。震災直後には混乱していた頭が冷静になってきたのか、あの頃の自分の体験に向き合つと今の方が涙があふれてきます。悲しみは年月を経て癒えるどころか、さらに増してきたように感じます。

二〇一四年の年明け、福島で医療活動を続ける坪倉正治医師と共に繰り返し開いてきた「正しい放射線勉強会」で毎回同じ質問が相次ぐことに、私は「何とかしなければ」との思いを強くしました。冊子を作ったらどうなるだろう。慎重を要するテーマだけに不安はありましたが、寄付を募ったところ、仕上がる前からテレビや新聞で取り上げられ、関心の深さを知り

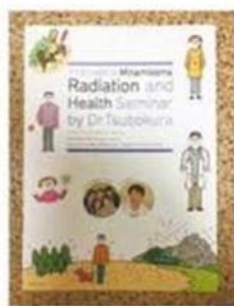


ベテランママの会代表
番場さち子さん



放射線が分かる冊子に反響

▶▶▶ 211



ました。

こうして八月八日の末広がりの日を指定し、「福島県南

相馬発 坪倉正治先生のよくわかる放射線教室」はデビューしました。わずか三週間で

初版二万冊のほとんどが飛び立ち、三万冊を再版依頼した

ほどです。省庁や企業、海に

関係する仕事の方など、福島

県だけでなく県外の方から、冊子の要望をたくさんいただきました。

インターナショナルスクー

ルに子どもを通わせるママたちからは「いつか、わが家の

子どもたちは、夫の母国や外国で暮らします。その時に福

島や日本の現状を自分の言葉で語れるよう、ぜひ英語版を

作ってほしい」と熱望されました。すぐに英訳に着手し

て、十月には英語版「写真」

一万冊が出来上がりました。冊子を求める背景には多数のドラマがあります。外国に嫁いだ娘が日本に帰省するこ

とを理解してもらうために欲しい、というご婦人がいました。「もう日本には住めないのではないかという不安が解消された」と、涙声の電話をいただいたこともあります。

そして七年目の今年、福島にまつわるいわれなき差別から解放されるか否かは、正しい知識習得の教育にかかっていると感じ、「放射線基礎知識テスト」も作成中です。目標とする受験者数は一万人。ここまで繰り返し行ってきた勉強会の集大成となる試みです。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。